

資料

自閉症スペクトラム障害をもつ子どもの歯磨き行動の自立に関する母親の思いと対処

Maternal recognition and coping for ASD children to brush their teeth by themselves

小笠原 梓¹⁾ 藤田 千春²⁾ 廣瀬 幸美³⁾
Azusa Ogasawara Chiharu Fujita Yukimi Hirose

キーワード：自閉症スペクトラム障害児、歯磨き行動、自立、母親

Key Words：children with autism spectrum disorders, tooth brushing, independence, mother

I はじめに

歯磨きの自立への支援は、う蝕予防のための手段にとどまらず、清潔習慣の獲得にも重要な支援¹⁾である。歯磨きなどの清潔行動における基本的な生活習慣は、親など身近な人の真似をすること、子どもの“汚い”“きれい”という感覚を育てながら清潔への興味関心を高め、日常生活の中に組み込めるようにすることが必要とされる¹⁾。幼児の口腔の清潔習慣の発達について、「歯磨きができる」は4歳前後とされている²⁾が、認知や微細運動が発達途上にある幼児の歯磨きによる清潔保持は、子どもの歯磨き後に親が磨くといった仕上げ磨きが必要不可欠となる。

自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorders:以下ASDとする)をもつ子どもは、定型発達児と比較して5本の指で歯ブラシを十分にコントロールするのが難しい³⁾など巧緻性が乏しく、歯磨き行動の獲得に困難を要することが多いと考えられる。また、ASDの特性として模倣遊びに関心の少ないことや感覚の偏り、抽象的・あいまいなことを理解する苦手さがあり⁴⁾、母親が清潔行動を教えることの難しさが予測される。さらにASD児は仕上げ磨き中に「泣き・暴れる」「歯ブラシを噛んでしまう」ため⁷⁾、母親は十分に仕上げ磨きが行えず、ASD児の口腔内の清潔が保てなくなってしまう⁸⁾。ASD児が口腔内の痛みを適切に訴えられなければ、う蝕の発見が遅れてしまうことが予測される。加えてASD児は初めての場所や見通しのつかなさなどに不安を生じやすく⁶⁾、歯科治療は子どものみならず母親にとっても困難を伴う場合が多い⁹⁾。

ASD児の歯磨き行動を促す工夫には、歯科医などが早期からの仕上げ磨き習慣化の提言¹⁰⁾をしている他に、ほめる、絵カードを利用する、磨く部位の順番を決める⁹⁾など定型発達児にも対応するような支援が示されている。しかし、ASD児の母親が子どもの歯磨き行動をどのように思い、子どもの歯磨き行動の自立に向けて、どのように対処しているのかについて明らかにしたものは見られない。

ASD児の多様な障害特性により母親の養育困難感は強く^{7) 9)}、子どもの歯磨き行動の自立を導く過程において様々な思いを持ちながら対処していることが推測される。

そこで本研究では、ASD児の歯磨き行動の自立に関する母親の思いと対処を明らかにし、ASD児の歯磨き行動が自立に向かうための母親への援助の示唆を得ることを目的とした。なお、本研究での思いとは、感情だけではなく認知や気づき、考えなど母親が広く認識している思いを指す。

II 方法

1. 対象

A療育センターに通い集団療育を受けている幼児期のASD児をもつ母親で、センターの施設長より紹介を受けた後、研究参加の承諾を得られた10名である。

2. データ収集方法

A療育センターに、平成23年8月に研究者が集団療育のボランティアとして2週間通い、母親らと関係性の構築を図った。その後施設長より運動発達遅滞や自傷・他害行為のな

Received : October, 31, 2013

Accepted : February, 17, 2014

1) 横浜市立大学附属市民総合医療センター

2) 横浜市立大学医学部看護学科小児看護学

3) 横浜市立大学医学部看護学科・大学院医学研究科看護学専攻小児看護学

いASD児の母親の紹介を受け、調査依頼を行った。同意を得られた10名の母親に半構成的面接調査を行った。調査時期は平成23年8～9月であり、調査内容は、母親とASD児の背景として母親の歯磨き行動、子どもの人数、ASD児の年齢、性別を把握した。半構成的面接では、母親に「現在のASD児の歯磨き行動」、「仕上げ磨きの状況」、「子どもの歯磨き行動が現状に至るまでのプロセス」、「歯磨きの自立に関する母親の思いと対処」をインタビューガイドに基づき聴取した。調査内容については対象者の許可を得てICレコーダーに録音した。インタビューはA療育センター内で行い、1名につき1回で、1名あたりの所要時間は20分程度であった。

3. 分析方法

インタビュー内容を逐語録化し、意味内容を損なわないようにデータのすべてを単文化した。各単文で語られている内容について、「ASD児の歯磨き自立に対する母親の思いと対処」という視点に基づきコード化した。コードの類似性、相違性により比較検討を繰り返して分類し、サブカテゴリー、カテゴリーを形成した。分析過程では妥当性を高めるため、小児看護領域の専門家2名と共にカテゴリーの一致をみるまで検討した。

4. 倫理的配慮

A療育センターの施設長に、研究目的、内容、倫理的配慮を口頭および書面で説明し、調査協力の同意を得た。また、施設長より紹介を受けた幼児期のASD児をもつ母親に、研究目的、内容、研究協力の自由意思と辞退の自由、個人情報守秘、データの適切な破棄等について文書を用いて説明し、記名にて同意を得た。研究計画は、横浜市立大学医学部看護学科卒業研究にかかる倫理審査会の承認を得た（承認番号：0811-083217）。

III 結果

1. 対象の背景

対象となった母親とそのASD児の背景を表1に示した。子どもの年齢は2歳7ヶ月から4歳2ヶ月（平均3歳9ヶ月）であった。全員が週に1回以上A療育センターに通所していた。子どもの性別は男児が6名、女児が4名で、歯磨き行動は1日1～3回であり、母親による仕上げ磨きは1日0～3回であった。0回と答えた母親は、子どもと一緒に磨いていた。ASD児以外に同胞がいないと答えたものが6名おり、ASD児の上に同胞がいると答えた母親は3名であった。母親自身の歯磨き回数は1日2～3回であった。

2. ASD児の歯磨き行動の自立に関する母親の思い

ASD児の歯磨き行動の自立に関する母親の思いについて、【歯磨き行動のかぎとなる子どもの特性】【歯磨きの自立と安全に対する親としての義務】【仕上げ磨きの困難さ】【自

表 1. 母親とそのASD児の背景

母 親	ASD児 の性別	ASD児 の年齢	ASD児 のきょう だい数	ASD児の 歯磨き行動 回数/日	母親による 仕上げ磨き 回数/日	母親自身の 歯磨き 回数/日
A	女	2歳7ヶ月	0	3	3	3
B	女	3歳5ヶ月	0	1～3	1～3	2
C	女	3歳5ヶ月	0	2+含嗽	2	2
D	男	3歳8ヶ月	0	1以上	1以上	2
E	女	3歳10ヶ月	0	1	1	2
F	男	4歳0ヶ月	1(妹)	1～2	1～2	2
G	男	4歳1ヶ月	2(兄)	1	1	2
H	男	4歳2ヶ月	0	3	0	3
I	男	4歳2ヶ月	1(姉)	2～3	2	2
J	男	4歳2ヶ月	1(兄)	2	2	2

立への期待ともどかしさ】【歯磨き行動への姿勢の変化】の5つのカテゴリーと15のサブカテゴリーが抽出された（表2）。以下、抽出されたカテゴリーに沿って結果を記述する。カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは《 》、主要コードは「 」で表す。なお、()は研究者が補足した部分である。

1) 【歯磨き行動のかぎとなる子どもの特性】

4つのサブカテゴリーから形成された。子どもの特性として、「歯ブラシの当たりとかに敏感なのかなと思う」ことや「歯磨き粉の匂いの方はだめかな」など《味やにおい・感覚に過敏さがある》ことや、《気分が乗らないと歯磨きをやらない》ことを気づいていた。仕上げ磨きをする時に仰向けを嫌がることや、「朝はイチゴ味の歯磨き粉で夜はメロン味（の歯磨き粉）っていうセオリーが子どもの中ではできている」など、子どもには《歯磨きのスタイルに特定の好みがある》と感じていた。母親は、「友達の歯磨き（の様子）や絵カードを見て、歯ブラシの使い方を理解したようです」と、子どもには《声かけよりも見て覚える》という特性があることを感じていた。

2) 【歯磨きの自立と安全に対する親としての義務】

3つのサブカテゴリーから形成された。母親は、子どもの歯磨き行動は「一応、歯ブラシを持ってちょっと動かせるけど全然上手じゃない」など、《歯磨きは不十分である》こと、「こういう子だから、歯が痛いって言えないかなって思うので、虫歯には気をつけてあげないといけない」や「（歯磨きを）嫌がってもやらなきゃいけない」といった《虫歯予防は親の義務である》と考えていた。そして、自立に向けて子どもに歯ブラシを持たせるものの、「転んだ時にも歯ブラシがのどに刺さったらというおそれがあった」というような《歯ブラシを持たせるのが怖い》思いをもっていた。

3) 【仕上げ磨きの困難さ】

2つのサブカテゴリーから形成された。母親は仕上げ磨き時に「動かし、噛まれるし、大変でした」と《仕上げ磨きへの抵抗が強い》ことを感じていた。また、母親は「嫌がった時に、無理やり歯磨きする時がすごく苦痛だった」と《拒否がつよい時の仕上げ磨きは避けたい》という思いを抱えていた。

4) 【自立への期待ともどかしさ】

3つのサブカテゴリーから形成された。母親は「歯ブラシ

表 2. ASD 児の歯磨き行動の自立に関する母親の思い

カテゴリー	サブカテゴリー	主要なコード
歯磨き行動のかぎとなる子どもの特性	味やにおい・感覚に過敏さがある	味とくに結構敏感 歯磨き粉の匂いの方はだめかな 歯ブラシの当たりとくに敏感なのかなと思う
	気分が乗らないと歯磨きをやらない	歯磨きも、気分がのらない時は嫌ってやらない 歯ブラシを渡すと、放っばらかしてしまう
	歯磨きのスタイルに特定の好みがある	横になって仕上げ磨きされるのは嫌なんだと思う あるメーカーの歯ブラシにしてから、くわえて噛み噛みやる 朝はイチゴ味の歯磨き粉で夜はメロン味（の歯磨き粉）っていうセオリーが子どもの中にできている
	声かけよりも見て覚える	友達の歯磨き（の様子）や絵カードを見て、歯ブラシの使い方を理解したようです 歯磨きが嫌だってなった時に、どうして歯磨きをするのか、ちょっとだけだからとか痛くないからって言葉がけをしても理解ができてない
	歯磨きの自立と安全に対する親としての義務	子どもの歯磨きは歯ブラシを持って、磨いているような、噛んでいるようなそんな感じ 一応、歯ブラシを持ってちょっと動かせるけど全然上手じゃない こういう子だから、歯が痛いって言えないかなって思うので、虫歯には気をつけてあげないといけない （歯磨き）嫌がっててもやらなきゃいけない
仕上げ磨きの困難さ	歯ブラシを持たせるのが怖い	転んだ時にもし歯ブラシがのどに刺さったらというおそれがあった 動かし、噛まれるし、大変でした
	仕上げ磨きへの抵抗が強い	（仕上げ磨きを）もう嫌がって口を開けるところまでいかない
自立への期待ともどかしさ	拒否がつよい時の仕上げ磨きは避けたい	歯ブラシを口に入れるのを嫌がる時は、仕上げ磨きを、あっ今日も忘れちゃったって、まずいなと思いつつも、忘れてた 嫌がった時に、無理やり歯磨きする時がすごく苦痛だった
	成長によって子ども自身でできることが増えてきた	歯ブラシずっと噛んでたんですけど、噛まなくなって歯ブラシをなんとなく動かすようになった
自立への期待ともどかしさ	自立に向けて期待している	ぐちゅぐちゅべがでできるようになれば、歯磨き粉も使えるから、今と違ってくだらう お兄ちゃん（定型発達児）の時はもうそろそろメロン味の歯磨き粉とかを試してた位なので、この子にもやってみたいなと思う
	まだ次のステップに進めない	自分で歯を磨いたら気持ち良くなるねっていうところをわかってもらえたらと思う うがいも今、口の中に水溜めたりとかっていうのはできないので、そのまま飲み込んでしまうから、まだちょっと止まっている 歯磨き粉を（使って）やったことで、歯磨きしなくなるのがちょっと怖い 自分で歯を磨きたいとか、歯を磨くと気持ちいいというのが、わかるように、なってほしいなって思うんですけど、なかなか（そうはならない）
歯磨き行動への姿勢の変化	歯磨きを無理強いするのは良くない	無理やり歯磨きさせると、それはそれで結構嫌がられる 歯磨きを無理強いしなくなったと思う ちょっと発達が遅れている分、ちょっとゆっくりでもいいかなっていう風には考えてます
	拒否が減ると仕上げ磨きが十分にできる	受け入れてくれるようになってからはちゃんと仕上げ磨きができるようになった 仕上げ磨きを嫌がらなくなれば習慣になってくるので、私にとっても（仕上げ磨きが）苦じゃなくなる
	歯磨き行動の自立への過度な期待が減った	遊びながらでもちょっと時間がかかってでも磨けるなというのがわかった 子どもに（歯磨きが上手くなるのを）求めすぎずに、余裕を持って見れるようになった 自分で磨かせるというプレッシャーみたいなのがちょっととれた

ずっと噛んでたんですけど、噛まなくなって歯ブラシをなんとなく動かすようになった」ことから、「成長によって子ども自身でできることが増えてきた」と感じていた。子どもの成長をふまえて、「お兄ちゃん（定型発達児）の時はもうそろそろメロン味の歯磨き粉とかを試してた位なので、この子にもやってみたいなと思う」など「自立に向けて期待している」とも思われていた。一方で「歯磨き粉を（使って）やったことで、歯磨きしなくなるのがちょっと怖い」など、それまでに積み上げてきたプロセスが後退してしまうかもしれないことや、「うがいも今、口の中に水溜めたりとかっていうのはできないので、まだちょっと止まっている」と「まだ次のステップに進めない」と感じていた。

5) 【歯磨き行動への姿勢の変化】

3つのサブカテゴリーから形成された。母親は、子どもの自立に向けて歯磨きを促していたが、「無理やり歯磨きさせると、それはそれで結構嫌がられる」ことから子どもに「歯磨きを無理強いするのは良くない」と思うようになっていた。また、「受け入れてくれるようになってからはちゃん

と仕上げ磨きができるようになった」と子どもの「拒否が減ると仕上げ磨きが十分にできる」と感じていた。さらに母親が「子どもに（歯磨きが上手くなるのを）求めすぎずに、余裕を持って見れるようになった」り「自分で磨かせるというプレッシャーみたいなのがちょっととれた」と、子どもに対する「歯磨き行動の自立への過度な期待が減った」とを自覚していたように子どもの歯磨き行動への母親の姿勢が変化していた。

3. ASD児の歯磨き行動の自立に関する母親の対処

ASD児の歯磨き行動の自立に関する母親の対処について、【歯磨き行動の不十分さを補う対応】【歯磨きを嫌いにならないような試み】【歯磨きが自立に向かうような援助】の3つのカテゴリーと10のサブカテゴリーが抽出された（表3）。

1) 【歯磨き行動の不十分さを補う対応】

3つのサブカテゴリーから形成された。「上の歯や奥歯、その辺は全部私がやってあげている」というように、母親は子どもの「歯磨きの不十分さを仕上げ磨きで補う」ようにしていた。仕上げ磨きだけでなく「まだブクブクうがい

表 3. ASD 児の歯磨き行動の自立に関する母親の対処

カテゴリー	サブカテゴリー	主要なコード
歯磨き行動の不十分さを補う対応	歯磨きの不十分さを仕上げ磨きで補う	1日1回だけは嫌がってもやらせてって感じでやらせてもらってます 上の歯や奥歯、その辺は全部私がやっけてあげている
	歯磨きの不十分さを家庭でのフッ素コートで補う	まだブクブクうがいが出来ないので、低濃度のフッ素スプレーを最後につけてあげる フッ素歯磨きってジェリー状の口の中が泡ぶくにならないのを使っていた
	虫歯になりにくい磨き方を専門家に教わる	3歳半までは保健センターに、3~4ヶ月位で健診に行ったら、歯磨きの仕方を聞いたり、虫歯チェックを受けている
歯磨きを嫌にならないような試み	歯磨きを嫌がらないような方法をとる	最近(形状の違う)歯ブラシに変えたんです 今は優しく、痛くないように仕上げ磨きをやっている ごろんするのが嫌だったら、そのまま立っている時に、ちょっとやらせてという感じで歯磨こうってやってみる
	やる気にさせる工夫をする	あー上手、パパが歯磨き見たいって言った、とか言ったりする テレビがあるリビングで歯磨きする
	嫌がらない歯磨き方法を専門家や経験者に相談する	今行ってる歯医者さんに、嫌がらない磨き方を習ってる お母さん同士でどうしてるー?って聞くことがある
歯磨きが自立に向かうような援助	状況に合わせた歯磨き物品を取り入れる	1歳ちょっと過ぎた頃から子ども用の歯磨きでも、乳児用のゴムで出来た歯磨きを使わせて ちっちゃい子ども用の、ちゃんとブラシがついているのを一人で持たせた こうやるんだよーって私が手を持ってあげる
	具体的に指示しながら補助する	絵カードを見せながら私が数えて、5まで数える じゃあくちゅくちゅしようかって言って洗面所に行ってもら
	視覚的に覚えてもらう	部位別に分けられた絵カードなんですけど、下の前歯と下の奥歯と分けてあるのを使っている 鏡を見せながら歯磨きする
	決まった方法で歯磨きをさせる	歯磨き粉をつけて最初に自分で歯磨きさせてます うちにいる時は、朝昼晩やるようにして、出かけても朝晩は歯磨きするようにします

が出来ないので、低濃度のフッ素スプレーを最後につけてあげる」など「歯磨きの不十分さを家庭でのフッ素コートで補う」こともしていた。母親は保健センターの定期健診を利用し、「3歳半までは保健センターに、3~4ヶ月位で健診に行ったら、歯磨きの仕方を聞いたり、虫歯チェックを受けている」といった「虫歯になりにくい磨き方を専門家に教わる」機会を作ることで、子どもの歯磨き行動の不十分さを補っていた。

2) 【歯磨きを嫌にならないような試み】

3つのサブカテゴリーから形成された。母親は、歯磨きをする際の体勢を気にする子どもに対して、「ごろんするのが嫌だったら、そのまま立ってる時に、ちょっとやらせてって感じで歯磨こうってやってみる」など、「歯磨きを嫌がらないような方法をとる」ようにしていた。また「あー上手、パパが歯磨き見たいって言ったとか言ったりする」ことや、テレビ番組の歯磨きコーナーの真似が好きな子どもでは「テレビがあるリビングで歯磨きする」ことなど、「やる気にさせる工夫をする」ようにしていた。さらに、「お母さん同士でどうしてるー?って聞くことがある」といった「嫌がらない歯磨き方法を専門家や経験者に相談する」ことをしていた。

3) 【歯磨きが自立に向かうような援助】

4つのサブカテゴリーから形成された。母親は、「1歳ちょっと過ぎた頃から子ども用の歯磨きでも、乳児用のゴムで出来た歯磨きを使わせて」と子どもの年齢よりも使いやすいから歯ブラシの選択をするなど、「状況に合わせた歯磨き物品を取り入れる」こと、歯ブラシの動かし方を「こうやるんだよーって私が手を持ってあげる」など、子どもに「具体的に指示しながら補助する」ことをしていた。また、子どもの特性を捉えて「鏡を見せながら歯磨きする」と

いった「視覚的に覚えてもらう」ようにしたり「うちにいる時は、朝昼晩やるようにして、出かけても朝晩は歯磨きするようにします」など歯を磨く時間や順序について「決まった方法で歯磨きをさせる」よう工夫をしていた。

IV 考 察

ASD児をもつ母親の歯磨きの自立に関する思いは、5つのカテゴリーが見出された。

幼児期にある子どもの歯磨き行動の自立を助けるために、母親は子どもへの歯磨き行動及び仕上げ磨きの支援が求められるが、ASD児は「横になって仕上げ磨きされるのは嫌なんだと思う」など、母親自身の歯磨き経験や定型発達の同胞の育児経験とは異なる歯磨きスタイルのような【歯磨き行動のかぎとなる子どもの特性】が見出された。またASD児の過敏さによって、仕上げ磨きが「動くし、嘔まれるし、大変でした」という【仕上げ磨きの困難さ】を実感していたことが明らかになった。これらはASDの障害特性である興味・関心の偏り、感覚過敏、こだわり^{4) 5) 11)}が反映されていると推測された。

自閉症児の「歯ブラシが口に入れられない」、「泣き・暴れる」は家庭での仕上げ磨きの困難性と関連が強いと言われ⁷⁾ている。今回調査した母親のほぼ全てが仕上げ磨きを毎日行うようにしていたものの、毎日仕上げ磨きを行っていた自閉症児の母親は2.9%という岡田らの調査⁸⁾もあることから、ASD児を持つ母親にとって仕上げ磨きは大きな負担となっていることが推察される。仕上げ磨きの困難は母親自身の理想としていた育児が滞り、ひいては育児不安につながる可能性が考えられた。

今回、母親には【歯磨きの自立と安全に対する親としての義務】として「虫歯予防は親の義務である」ことが見出

された。「こういう子だから、歯が痛いって言えないかなって思うので、虫歯には気をつけてあげないといけない」と思っていたことは、言語発達が定型発達児より遅延するなど、ASD児のコミュニケーションの質的異常の特性⁴⁶⁾を母親がふまえて子どもの虫歯予防に人一倍気を遣っていたことがうかがえた。また、ASD児は環境の変化への柔軟な対応が出来ないことや感覚器の調整機能に障害があるため、歯科の治療行為に強い抵抗を示し、母親が「診療の拒絶を予測したためらい」を感じる¹²⁾と言われている。そのため子どもに歯科治療の機会を作らないで済むようにという思いも考えられた。このようにASD児の母親は定型発達児の母親以上に「虫歯予防は親の義務である」という思いをもっていることを理解する必要がある。母親の義務感が強いところに子どもが「嫌がった時に、無理やり歯磨きする時がすごく苦痛だった」といった【仕上げ磨きの困難さ】は親の義務を果たせない気持ちとして蓄積し、育児ストレスに感じている様相が見られた。親としての義務感を強く持っている母親ほど、子どもの仕上げ磨きの困難さに対して、育児ストレスを助長させる可能性が示唆された。

母親は子どもの歯磨き行動の自立に関して【自立への期待ともどかしさ】を感じていた。これは「成長によって子ども自身でできることが増えてきた」ことで自立への期待をもっていたが、その一方で「歯磨き粉を（使って）やったことで、歯磨きしなくなるのがちょっと怖い」のような「まだ次のステップに進めない」という思いもしていた。ASD児は感覚異常を呈することがあり、定型発達児以上に「嫌なもの」を敏感に捉え拒否反応を示す⁵⁾ことがある。歯磨き粉の使用など新たな取り組みを子どもが拒否することによって、今まで積み上げた歯磨き行動を後退させてしまうと母親が懸念していることが推察された。

また、【歯磨き行動への姿勢の変化】も見出された。母親はASD児の特性が反映した特異的な歯磨き行動と仕上げ磨きの困難さを実感した中で、子どもの歯磨き行動の自立に関して「ちょっと発達が遅れている分、ちょっとゆっくりでもいいかなっていう風には考えてます」と、自分の思いと子どもにかかわる態度が徐々に変化していることを語った。発達障害をもつ母親の子育てのプロセスにおいて、母親と子どもとの向き合い方を探し直す経験が子どもとの関係や子育てへの考え方を変化させていたと報告している¹³⁾のと同様に、【歯磨き行動への姿勢の変化】は、日々のかかわりの中で困難さ、期待やもどかしさを経験することで生じたと考えられた。母親が子どもへのかかわりの困難さから、子どもとの向き合い方を見出せたというのは、子どもの反応をよく捉えていたことによるものであるため【歯磨き行動への姿勢の変化】がスムーズに進むことで、母親の育児ストレスの軽減につながっていくのではないかと考えられた。

母親は子どもにフッ素入りのスプレーを使うなど、【歯磨き行動の不十分さを補う対応】を行っていた。定型発達児にも近年汎用されているフッ素入りスプレーであるが、

ASD児の母親は子どもの仕上げ磨きを不十分と捉えており、歯磨きの不足を補うものとして、フッ素入りのスプレーは定型発達児の母親以上に必需品としていたことが推測される。フッ素は虫歯予防に効果があるためこの対処を支持し、子どもへの支援が促進されるようにしていく必要性が考えられた。また、母親は【歯磨きを嫌いにしないような試み】として歯ブラシを子どもが嫌がらないものにする、「今は優しく、痛くないように仕上げ磨きをやっている」などの対処を行っていた。これは発達障害児の触覚の感覚発達に偏りがある¹⁴⁾という特性をふまえて対処していると推察された。このように子どもが嫌がることを避けることで歯磨き行動の支援を拒否される頻度が減り、母親の仕上げ磨きへの負担感が軽減していくと考えられる。母親は臥床して仕上げ磨きを嫌がる子どもに仰向け以外の体勢で仕上げ磨きをしていたが、これは子どものこだわりをくみ取った対処であった。自閉症者はいったん歯磨き行動が確立されれば、それに「こだわって」食後の歯磨きを忘れないといった長所⁹⁾がある。ASD児の歯磨き行動の自立には、子どものこだわりや過敏さを捉えた対処を歯磨き行動の支援に取り入れる必要性が考えられた。

さらに母親が行っていた絵カードを用いるなど「具体的に指示しながら補助する」という【子どもの歯磨きが自立に向かうような援助】は、幼児期の発達障害児では聴覚のみの情報は記憶に残りにくいため、聴覚と視覚を用いた説明によって¹⁵⁾歯磨き行動の理解を促していたと推察された。ASD児の歯磨き行動の自立に向けて、子どもの特性をふまえて対処している母親には、その行動を支持していくことが大切である。一方で子どもの歯磨き行動の自立に悩みを持つ母親には、最初のステップとして子どもの巧緻性を高める遊びを取り入れて歯ブラシの操作につなげていくこと、子どもの嫌がる事柄を捉え除去することを支援していく必要性が考えられた。さらなる歯磨き行動の習得には構造化⁵⁾を利用して具体的に視覚に働きかけることで子どもの理解を助けるような、子どもの障害特性をふまえた支援法を助言することが必要であると考えられた。

母親は、「虫歯になりにくい磨き方を専門家に教わる」ことや、子どもが「嫌がらない歯磨き方法を専門家や経験者へ相談する」ようにしており、特に乳幼児健診を子どもの歯磨きや歯の健康に関する不安の解決の手立てを得るひとつの機会として活用していた。ASD児をもつ母親は虫歯予防を親の義務と捉えていたことから、子どもの歯磨きや口腔衛生に関する母親の思いを真摯に傾聴して理解に努めることの重要性が考えられた。また育児ストレスを抱えている母親には、ASD児が歯磨きを嫌いにしないよう、痛くない仕上げ磨きや好みの歯ブラシや子どもの強みとして活用できそうなこだわりを取り入れるなどの対処を提案することに加え、ASD児をもつ経験者から話を伺う機会を設けていくことで育児ストレス軽減に寄与する可能性がある。さらに歯科専門職から医療的な情報を得られるひとつの場

として、健診の機会を活かす必要性が示唆された。

V 本研究の限界と今後の課題

本研究はASD児の歯磨き行動の自立に関する母親の思いと対処の実態を明らかにした意義がある一方で、調査対象者が1施設の10名に限られていたことから本結果を一般化するには今後さらに、施設や対象者を増やし調査していく必要がある。

VI 結論

1. ASD児の歯磨き行動の自立に関する母親の思いとして

【歯磨き行動のかぎとなる子どもの特性】【歯磨きの自立と安全に対する親としての義務】【仕上げ磨きの困難さ】【自立への期待ともどかしさ】【歯磨き行動への姿勢の変化】の5つのカテゴリ、対処として【歯磨き行動の不十分さを補う対応】【歯磨きを嫌いにならないような試み】【歯磨きが自立に向かうような援助】の3つのカテゴリが抽出された。

2. ASD児の歯磨きは母親自身や同胞の育児経験とは異なる歯磨きスタイルがあること、ASD児の過敏さによって「仕上げ磨きへの抵抗が強い」ことを実感していたが、子どもに虫歯や歯科受診の機会が生じないように「虫歯予防は親の義務である」ことを定型発達児の母親以上に実感していることがうかがえた。

3. 母親は子どもの特異的な歯磨き行動と仕上げ磨きの困難さを実感した中で、子どもの歯磨き行動の自立に関する自分の思いと子どもにかかわる姿勢が変化しており、この姿勢の変化は子どもの反応を捉えた上での変化であった。

4. 母親は子どもの歯磨き行動の自立のために、子どもの特性や発達をふまえて歯磨き行動の不十分さを補う対応や歯磨きを嫌いにならないような試みを工夫しており、母親の工夫は子どもに合った支援となっていた。

5. 仕上げ磨きの困難や、虫歯予防の義務感で育児ストレスを抱えている母親にはASD児が仕上げ磨きを嫌いにならないよう、子どものこだわりや好みを仕上げ磨きに取り入れるなどの方策を提案することに加え、ASD児をもつ経験者から話を伺う機会を設けていくことで育児ストレス軽減に寄与する可能性がある。さらに健診の機会を歯科専門職から情報を得る場として活用する必要性が示唆された。

謝辞

本研究を行うにあたり、ご多忙な中、調査にご協力いただきました対象者の皆様、A療育センターの職員の皆様に心より感謝申し上げます。なお本研究の一部は第22回日本小

児看護学会学術集会において発表した。

引用文献

- 1) 中野綾美 (編) : ナーシング・グラフィカ28 小児看護学 ① - 小児の発達と看護. メディカ出版, 大阪 : 115-118, 2013.
- 2) 社団法人日本小児保健学会 : DENVER II - デンバー発達判定法 -. 日本小児医事出版社, 東京 : 28, 2003.
- 3) 高橋諒子, 平元泉, 高倉弘美 : 発達障害児の歯磨き行動の実態 - 保育園児との比較 -. 日本看護学会論文集 小児看護, 40 : 54-56, 2010.
- 4) 杉山登志郎 : 自閉症スペクトラムの生物学 自閉症スペクトラムとは. 分子精神医学, 11 (4) : 264-268, 2011.
- 5) 今井美保 : 自閉症 (および広汎性発達障害) とは, 伊藤利之, 北村由紀子, 小池純子, 他 (編) : 発達障害児のリハビリテーション - 運動発達系障害と精神発達系障害 -. 永井書店, 大阪 : 244-283, 2008.
- 6) 村松陽子 : 発達障害とは何か, 小児看護, 35 (5) : 528-533, 2012.
- 7) 平岡俊章, 草部能孝, 岡本卓真, 他 : 自閉症児が仕上げみがき時に表出する行動・症状. 小児歯科学雑誌, 45 (1) : 156, 2007.
- 8) 岡田和子, 溝口理知子, 河合利方, 他 : 発達障害児における仕上げみがきへの母親の取り組み態度 第1報 初診時の実態. 障害者歯科, 25 (3) : 467, 2004.
- 9) 原田桂子, 西野瑞穂 : 自閉症児 (者) の口腔保健管理に関する調査 - 歯科診査票と歯磨きの実態より -. 障害者歯科, 23 (4) : 532-538, 2002.
- 10) 岡田和子, 溝口理知子, 河合利方, 他 : 発達障害児における仕上げみがきへの母親の取り組み態度 第2報 定期的に管理した3年後の状況. 障害者歯科, 26 (3) : 593, 2005.
- 11) 岩沼智美, 前田知美, 後藤悦子 : 発達障害 (自閉症スペクトラム) 児の口腔ケア. 小児看護, 34 (12) : 1619-1626, 2011.
- 12) 山内昭子, 田中慶子, 井上伸江, 他 : 自閉症児の歯科受診にともなう母親の思い. 家族看護学研究, 15 (1) : 22-29, 2009.
- 13) 山本真実, 門間晶子, 加藤基子 : 自閉症を主とする広汎性発達障害の子どもをもつ母親の子育てのプロセス. 日本看護研究学会雑誌, 33 (4) : 21-30, 2010.
- 14) 平岡俊章, 岡本卓真, 坪井信二, 他 : 発達障害児における仕上げみがき・介助みがきの受容に関する研究 - 第1報 感覚機能の発達との関連 -. 小児歯科学雑誌, 45 (2) : 292, 2007.
- 15) 石塚百合子, 今野美紀, 上村浩太 : 幼児期・軽度発達がい児と家族への支援. 札幌医科大学保健医療学部紀要, 8 : 79-84, 2005.